



Title	“77” 有田コレラの教訓
Author(s)	辻野, 直三郎
Citation	makoto. 1977, 20, p. 18-20
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/86175
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

'77 有田コレラの教訓

財団法人 大阪防疫協会

理事長 辻 野 直三郎

はじめに

隣接和歌山県有田市（紀州みかんの名産地）において検疫伝染病「コレラ」患者が六月十五日に真性二名、疑似七名計九名発生二十五日現在には真性二名疑似二〇名（内一名死亡）健康保菌者五二名計九三名を隔離するという近年にない爆発的コレラ患者を出したことにについて、この際これが経過などを探究することは、この二度とこの伝染病による犠牲者と甚大なる経済的被害を防止するためにもこれが手段方法をつぶさに検討し教訓となさなければならぬと信ずるからである。

感染経路

(一) 患者発生状況

a、有田市戦跡慰霊遺族会員五一名が五月二十二日午前一時一五十分大阪空港発同日午後二時マニラ到着フィリピン各地を旅行後五月二十六日午前一時マニラ空港発台北經由同日午後五時一五十分大阪空港を経て午後一〇時二〇分観光バスで有田市へ帰着、解散となっている。これによれば五日間フィリピンで滞在したことになる。

b、戦跡慰霊遺族会員の有田市帰着より六日後の六月三

直三郎

日から十五日までに有田市内で吐気を伴う激しい下痢脱水症状を訴えている者があった。但しこの患者の中には慰霊遺族会員の発病者是一名もない。しかしながら最初に発表された患者の七名が有田市港町居住者で二名は同町内にある会社の従業員である。

c、コレラ菌の検出はbの九名について国立予防衛生研究所の検便の結果六月十五日にいたって真性コレラ菌の検出が決定されたものである。これによれば戦跡慰霊遺族会員の帰着後すでに

(二) コレラ患者発生地域別

a、有田市港町、初島、箕島、（以上は多発区域）古江見辻堂、宮崎、宮原町などであるが特に有田市初島町浜、東亜燃料工業和歌山工場及び関係会社員一名がいることは問題を提起している。

b、有田市の外和歌山市、有田郡吉備町、湯浅町、広川町、日高郡美浜町、由良町にも発生し七市、町におよんでいる。

(三) 有田コレラの共通するものは

a、フィリピンの旅行者であるか又はその周辺往来による

b、コレラ菌が同じエルトール小川型であること

c、フィリピンはコレラ汚染地域であること

以上諸点を総合すると感染原因は

i、有田市の公共下水道整備不完全により下水が汚染されこれが井戸水に流れ込んだものである。六月二十

(四) 状況

一日採水の三カ所及び二十二日採水分二カ所の下水排水口よりコレラ菌が検出された。

ロ、隔離前の真性、疑似、健康保菌者などによる接触、会合による感染。

ハ、魚貝類、野菜などによる感染？

患者の追跡調査その他決定的感染経路が説明されていない限り複合汚染と見做さるべきは、やむをえないことである。

有田市の公共下水道の処理状況

イ、面積 三六、四九平方km

世帯 九、四五二世帯

人口 三五、七八〇人

ロ、公共下水道の普及率はゼロで汲取式トイレである。

ハ、収集して千田西の市営屎尿処理場で処理し、簡易浄化設備のあるのは市役所、病院などの公共施設の一部だけで終末処理場は勿論下水道もない。浄化槽があっても汚水はその儘市内の河川を通じて有田川に流されている。約一、三〇〇戸のうち自家浄化槽で簡易処理しているのは約百戸といわれその排水のすべてはこの下水に流入している。（六

(五) 月二十一日読売新聞)

1、有田コレラの問題点

1、汚染地域の予防接種

イ、フィリピンはWHO世界保健機関に報告されて

いる「コレラ汚染地域」

(常在国)であるにもかかわらず右地域に渡航する者には予防接種の実施が義務づけられていない

こと

ロ、同地域とその他の汚染地域、常在国はタイ、インドネシア、マレーシア、スリランカ、インド亜大陸、アフリカ、ヨーロッパの一部よりの渡航者、一時滞在者または帰国者に対しての空、海検疫が極めて不十分である。これは極度に簡素化によるものではあるまいか?

ハ、前項の人々に対する一定期間のチェックは十分行なわれていないのではないか?

以上の諸点が適切実施されなければ一度患者又は保菌者が入国せんか多少の程度差はあれ汚染の危険はつねに免れないことは必然的である。

2、入国者の統計

最近の統計によれば空からの入国者は年間三二、九〇〇便四、二七〇、〇〇〇

人海からは年間四二、〇〇〇隻一九〇万人といわれ、この二八分の一〇、〇〇〇隻が無線検疫(六月二十二日日本経済新聞)ですまされているとは啞然たるものがある。

(六) 急性伝染病の統計

昭和五〇年における急性伝染病の死者は年間一、七七六人でその内訳は結核を除き、

1、インフルエンザ

一、三九一人

2、はしか

二二二二人

3、破傷風

八五五人

4、日本脳炎

二五五人

5、流行性脳せき髄膜炎

一〇人の順である。

6、コレラ、ペスト、天然痘、発疹チフス、黄熱病、回帰病、狂犬病などはわが国に常在しないといわれ?この伝染病死者は一人も出ていなかったがしかしそれは伝染病禍が絶滅されたことを決して意味しない(六月二十二日日本経済新聞)ことであろう、疑問なきを得ない。

(七) 和歌山県コレラ防疫対策本部設置

六月十五日に国立予防衛生研究所において同夜九時「エルトール小川菌」が二名より検出真性コレラと診断され、午後一〇時一五分県庁内にコレラ防疫対策本部が設置された。(対策本部長飯谷志良(知事)、対策部長北田章(衛生部長) 六月二十日には主管省渡辺厚生大臣の実情調査のための有田市入りしたことはもとより既に十九日には佐分利輝彦公衆衛生局長(当時)、福見秀雄国立予防衛生研究所長(厚相の諮問機関である「伝染病予防調査会」の伝染病対策部会長)、杉山克己農林省食品流通局長ら中央官庁の主脳が和歌山県入りをするなど十七日に厚生省がWHO世界保健機関に有田市をコレラ汚染地域に報告後の防疫対策関係者往来は極めて頻繁の度を加えた。なお大阪大学微生物病研究所三輪谷俊夫教授、財団法人阪大微生物病研究会の小寺健一検査部長、日本医科大学乗木秀夫教授(消化器伝染病)など伝染病専門グループの活躍が報道されている。また隣接地としての大府からは公衆衛生研究所原田七寛微生物課長、衛生部環境保健課主査横山昌弘先生も現地に応援のため急遽派遣された。六月二十二日には陸上自衛隊第三師団衛生隊六〇名が市の要請に基いて派遣され三日間に涉って下水道その他の公共施設に対し消毒を徹底的に実施してこれが撲滅と予防に努めた。

(八) コレラ汚染地域の解除

a、汚染地域の指定は六月十七日厚生省よりWHO世界保健機関に報告されたが最終患者一名発生の二十一日を最後として真性患者の発生をみないため国際保健規則第七条により二四〇時間(十日)後の七月二日をもって汚染地域解除が決定された。しかし集団発生コレラについての疫学調査の感染資料は不十分とされている。

(九)

被害総額は一二五億円余

a、和歌山県は六月三十日有田市を中心とする被害総額をまとめ同日開いた県議会に報告した。総額一二五億七五〇万円

b、内訳

1、農畜産物関係

二〇億三、七五〇万円

ロ、鮮魚水揚げなど漁業関係

卸小売加工業輸送部門など商工関係

六五億七、〇〇〇万円

ハ、旅館の予約取消一七万人余渡船の中止など観光関係二億八、〇〇〇万円

ニ、アユ、ハマチなどの養殖関係

一一億二、〇〇〇万円

となつてゐるが之に含まれていないものの増加は必至でなお莫大な額に達することが予想される。

これによつても経済的被害のみでも莫大なるものがあることを体験させられたことである。

(十) 防疫マン「貴重な実戦訓」

前述のように、有田市コレラ集団発生事件は六月二十五日飯谷県知事の「水産物安全宣言」でようやく終息に向かつてが現地は農産物の出荷ストップ、患者の隔離、商店の休業などパニック状態に追込まれたがコレラ菌との縁のうすかった医療陣はとさのことに打つ手が遅れ対策が常に従手に廻った。ところが海外旅行ブームの今日いつ日本のどこで「第二の有田事件」が

起さるかもしれない近畿衛生検査技師会では六月二十五日阪大微生物病研究所（吹田市）主催で「コレラセミナー」を開催、会場には近畿各府県から一七〇人出席、主唱者でコレラ研究の第一人者藤野恒三郎大阪大学名誉教授は「こんどの事件は高い授業料を払って招いた「遠来の偉大な教師」だ。この教えを今後に生かしてほしい」と訴えた。

藤野名誉教授はまず「コレラ絶滅の第一線に立つ人々は十分な専門知識が要求されるのに顕微鏡をのぞかない技師がいる」と苦言、戦時中タイやビルマで月明りの下でコレラ菌を見つけた苦労話をまじえながら「現在流行しているエルトールコレラはアジアコレラより病原体が弱いといわれるがこれは誤りだ。衛生状態や栄養状態がよいので患者の数が少なく症状も軽くすんだが輸液で治療できるといつても七十歳を超える老人では死の危険もある」と恐ろしさを指摘、コレラ菌の形態、検査の症状などをくわしく講義した。とくに同名誉教授は、▼コレラ菌とよく似た腸炎ビブリオとの正確な判別

▼検体を調べるだけではなく患者の症状に関心を持つ
▼検査中に感染する危険もあるので必ずワクチン接種を受ける……などを強調した。

次いで大阪大学微生物研究所の三輪谷俊夫教授は発生以来現地で防疫対策の陣頭に立って来た経験から「今度のコレラ事件はまさに戦争だった。その中で決断力を持ち一つの方向に添った防疫体制をつくる必要だと痛感した」と前置し、患者発生の状況と対策について報告した。（中略）防疫対策の一つは隔離病棟の確保、東南アジアのデーターでは一人の患者の周囲に二〇―三〇人の保菌者がいるというのが常識だが三輪谷教授は上水道の完備している有田市では、その半数程度の約百人と推定し有田市長に提案してプレハブ病棟を建てるなどして混乱を防ぐことができた。

感染経路については同教授は下水から何らかの形で食品中で増殖されたと推測、「どんな形でコレラ菌が増幅されていったかを解明することは今後の防疫対策の教訓となるであろう」と述べた。

さらに現地で連日約四千人

分の検体の菌の検査を指揮した大阪大学微生物研究会の小寺健一検査部長はコレラ菌の検査法を中心に講演した。コレラ菌は培養液の上層に膜をつくるのが常識だが、わが国では患者が下痢のために抗生物質を飲むため、菌が弱って膜をつくらないケースがあり、有田でもそのような例が見つかった。小寺部長は「コレラらしい患者が出たら、とにかく伝染病専門病院などに早く連絡すること。自分の手で何もかも決定しようと時間をかけているとその間に患者が広がる」と注意を呼びかけた。

事件発生以来このようなセミナーが開かれたのは初めてで、会場は病院、研究所の第一線で働く検査技師で埋まった。有田市の患者から分離したコレラ菌を使つての実習をまじえ、セミナーは約五時間たっぷり続けられた。（六月二十六日読売新聞）私はこのようなセミナーがかん髪を入れず阪大微研によつて主催されたことについて深い感銘と感謝と限りない敬意を表する次第であります。

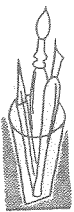
むすび

このたびの有田コレラ発生に

よつて貴い犠牲者一人を出したのみならず隔離された者六月二十五日現在九三人の外、県内外の国民に与えた異常恐怖感はいくら知れないものがあるばかりでなく有田市民の蒙つた物的経済的莫大な損害を思う時胸のいたみを覚える。第二の有田コレラ事件を防止するためには行政ならびに民間の憂うべき風潮「急性伝染病」軽視の実態にメスを入れあらゆる観点からこの際先進文明国の名に恥じない「伝染病対策」の確立に官民協力一致して当たらなければならない。

ここにコレラ犠牲者に対して黙禱を捧げ且つ日夜をわかつた防疫対策に懸命の努力をされた地元の方は勿論之に活躍された方がたに厚く感謝の意を表して拙ない稿を擲筆する。

素人の梅酒つくれることしかな。



本紙「まこと」主要配布先

（順不同）

（発行部数2,000部）

厚生省関係局、部、課	大阪府衛生部各課及出先機関	大阪府下各市町村
環境庁関係局、課	同 農林部各課及出先機関	関係公社、公団等
各都道府県関係課	同 関係各部各課及出先機関	大阪府外部団体及府関係団体等
各政令都市関係課	大阪府警本部及出先機関	協同組合等公共的団体、その他